

「太陽が恥じらうかのように赤く昇ると」

—— 中世南仏の物語『フラメンカ』をめぐって ——

瀬戸直彦

13世紀の中葉から末にかけて記されたらしいオック語による物語『フラメンカ』は、中世における聖と俗の問題を考える上で鍵となる作品である。当時のフランスの主として韻文による物語としては、ギリシア・ラテンの古典作品を換骨奪胎した古代物語とか、ケルト・ブルターニュの超自然の素材をもとにしたアルチュール王に関連する多くの作品があったが、それらとは異なり、「冒険物語」とか「風俗物語」とか「現実的物語」roman réaliste と呼ばれるもののひとつである。名称がすわりの悪いこのジャンルは、要するに古典古代に材をとったものでもなく、超自然の要素も含まない、昔は良かったというモチーフはあるにしても、作者と同時代らしい題材を描く作品の総称である。

北フランスでは、数多くのこの種の物語が残されているが、とくにジャン・ルナール、アドネ・ル・ロワというすぐれた作者が知られている。南フランスでは作者不明のこの『フラメンカ』が出色であろう。いや出色などという形容では物足りない。きわめて洗練された内容で作品構成上も興味深く、また17世紀以降のフランス心理小説の嚆矢とさえいわれる傑作である。内容が展開されるのは1234年ころという研究がある⁽¹⁾。物語中の教会暦・移動祝日の日付などからカレンダーを作成すると、この年が舞台にされたと推測できる。内容はあしかけ4年のできごとを記し、行数にして残っている部分は8095行におよぶ。

嫉妬の病にとりつかれた夫、そして彼により塔に幽閉されたヒロインにたいして、青年騎士がいかにして意を通じさせるかという中世的な主題が、この作品ではどのようにして巧妙かつ大胆な筋によって展開されるのだろうか。南仏のトルバドゥールがうたった既婚の「貴婦人」(ダーム)への恋愛詩を物語化したものととらえることもできる。ここでは、これまでの研究を概観した上で、いくつかの箇所、とくに大団円に近い部分の表現に注目して、とくに作者の表現における大胆さというべき側面を浮き彫りにできればと思う⁽²⁾。

I. 写本と校訂そして作品論

この作品の現存する唯一の写本 Carcassonne, Bibliothèque municipale 35 (olim 34 ; anc. 2703) は、Aude 県の知事ガブリエル・ドレッセル Gabriel Delessert が、1834年にカルカソンヌ市立図書館で発見したものである⁽³⁾。オック語の作品らしいと見てとったこの人は、フランソワ・

レヌアール（1761-1836年）に鑑定を依頼した。約215×142ミリで各ページ1欄ずつ140葉ほどの小型の写本で、この作品のみが収録されている。レヌアールは、トルバドゥールを初めて本格的に紹介した文人であり、ロマンス語学の創始者とされる。当時は、*Lexique roman ou dictionnaire de la langue des troubadours*（略号 Rn あるいは LR）と名づけた中世オック語の大部の辞書を編纂中である。ドレッセルが写本の解説を依頼したのは、レヌアールの最晩年にあたるが、彼はこれを未発見の傑作であると見抜いて *Notices et extraits des manuscrits de la Bibliothèque Nationale et autres bibliothèques* という学術誌に紹介した（1835-38年）。没後に出版されたその辞書の第1巻に多少追加して1000行ほどの抜粋が掲載される（1838年）。

全篇の校訂は、1865年に新進気鋭の文献学者ポール・メイエル（1840-1917年）によってなされた。彼は写本の全8095行（数え方によっては8101行）すべてを校訂し、後ろに註とその現代語訳を付した（解釈上難解な部分は、今後の研究にゆだねるとして、...という印をつけて省いてある）。フランス以外の、カルル・バルチュ、アドルフ・トブラー、アドルフォ・ムサッフィアといった文献学者がすぐに書評を加えたが、11年後にモンペリエのカミーユ・シャバノー（1831-1908年）の出した詳細かつ厳格な書評が重要である。40年近くたった1901年には同じメイエルが、満を持してとっていいのであろう、巻末にかなり詳しい語彙集を付した改訂版第1巻を上梓した。ところが、第2巻に予定されていた現代語訳と註釈は出版されずに終わっている。シャバノーの再度の厳しい書評で意気沮喪したためともいわれるが、理由は定かではない。シャバノーは、牙城としていた *Revue des langues romanes* 誌 (RLaR) の中世オック語の関連部分をしきっており、続々と出版される種々の校訂版にたいして厳格な書評を毎号に掲載していた。とくにメイエルに厳しかったわけではない。初版から40年近くたって、いまやコレージュ・ド・フランス教授（1876-1906年）にして古文書学校校長となった（1882年）パリのメイエルが新版のこの第1巻を出したさいに、つぎのように記している。「新版は初版にくらべてたしかに多に改善され、毀損した箇所は巧妙に再構成されている。とはいえ、第2巻を待つまでもなく、まだ決定版とはいえない」「フラメンカのおかげで輝やかな学究生活の第一歩を踏み出したのだ、どうか更なる注意をもってテキストを読み直してほしい」「何度も言うが、メイエル氏をおいてこれをなしとげられる人はいない」⁽⁴⁾などと結論づけている。これはむしろ、たたきあげの南仏人の心からの励ましととれる。他人に対してだけでなく自分にたいしてもおそろしく厳格なメイエルが、第2巻をそのまま出すのを潔しとしなかったというのが真相ではないかと私は思う。

この作品は、1写本でしか読めない上に、冒頭と末尾が欠落し、途中の紙葉も何枚か抜けている。エクス＝アン＝プロヴァンスの、ルイ9世の弟シャルルを祖とするアンジュー家の宮廷周辺で14世紀初頭に記したらしい写字生⁽⁵⁾は、必ずしも伶俐な人物ではなかったようで不注意な読みや解釈の困難なところが多い。じっさい、写本の読みとメイエルが推測したテキストを仔細に比べてみると、まがりなりにも読めるようにしたその功績はたいへんなものであったことがわか

る。その後の校訂や解釈は、メイエル的基础作業なくしてはまったく成り立たなかったはずである。

その後、この難解なテキストをメイエルの向こうをはって校訂しようとする勇敢な人は現れず、この1901年のものが事実上のスタンダードとして尊重されてきた。語彙集が豊富で使いやすかったためもあるだろう。1904年（1924年、1926年に再刊）にはシャルル＝ヴィクトル・ラングロワによる解説を付した手際のよいダイジェストが出ている。アルベルト・リメンタニ（1965年）（3400行ほどの抜粋だがよく出来ている）、ウルリヒ・グシュヴィンド（1976年）による校訂の試み（まじめな校訂だが、それほどの進歩はないとされる）をのぞくと、ほかの種々の『フラメンカ』はほとんどメイエルの第2版をもとにしたものであった。作品の内容がきわめて興味深いために、各国語に訳されたり、翻案されたりしている。

21世紀になってようやく事態が動く。イタリアのロベルタ・マネッティは、巻末にすべての語彙とその語の出現箇所、文法上の諸情報を網羅した語彙集を付した、厳密で大部の校訂を世に問うた（2008年）。私にとっては、その語彙集はたしかに便利ではあるものの、たとえば*faire*といった重要語を見ると、きわめて詳しいが語義区分が明瞭でなく、使いにくいところもあるという印象である。内容とは無関係だが、メイエル第2版の付した行数を全体にわたって少しずらしたので参照に不便になった。きわめて稠密なページ構成で読みづらく、活字も細かすぎる。

いっぽうフランスでは、Lettres gothiques 叢書から2014年にフランソワ・ズュフレ（校訂と文献学的解説と脚註を担当）とヴァレリ・ファッスール（現代フランス語訳と解説を担当）による新しい校訂が出た⁽⁶⁾。これは一般向けの叢書の一冊なので、マネッティのように完全な語彙集を付したり詳細なテキスト設定上の議論を展開するものではない。それでも可能なかぎり文献学的な脚註を付し、さらにブルボン・ラルシャンポーの城の復元図や町の地図、固有名詞索引などを付けて作品を楽しめるような工夫がしてある。本文テキスト（左ページ）の上にはかれらが内容を整理してつけた章題を付し、対応するフランス語訳（右ページ）の上には欄外見出し（その部分の簡単なレジメ）をたんねんにつけてある。頭の解説におけるファッスールのかなり長い文学的解説（p. 33-94）は、ほとんど独立した作品論になっている。両者相補う立場にあるといえよう⁽⁷⁾。

なお2713-2720行にあたる部分が、14世紀末から15世紀初頭に記されたカタロニアの Estanislau Aguiló 写本（E）にあることが1985年のステファノ・アスペルティの論考で明らかにされた⁽⁸⁾。しかし、この部分は、「愛の神 Amors が弓を射ると、射られた人の心に矢が固着し、肉体的な怪我こそしないものの、その矢を引き離すことはできなくなる。まことに愛の神ほど巧みな射手はいない」という内容で、愛にかんする一種の格言集とみなすべきものである。独立してよめる部分であり、『フラメンカ』の写本というよりも、わずか8行の断簡とみなすべきであろう。

作品論としては、ここで詳しく述べる余裕はない。1930年に出たシャルル・グリムによる作中

の紋章教会暦による年代措定の試み、ジョルジュ・ミヤルデによる、作品のユニークさの簡にして要を得た紹介（1937年）、ルネ・ネリによる作中の性愛についての、とくにオウィディウスを源泉とする面からの解説（1966年）、リタ・ルジュヌス（1973-1979年）、ジェラルド・グイランによる一連の論考（1983年から）など枚挙にいとまがない。

II. 物語の特徴—ヌムールかナミュールか

ここでは『フラメンカ』のあらすじを述べることは避けたい。いくつかのモチーフを記しておけば、おのずからこの物語の特徴が明らかになるかと思う。まず、西欧中世に珍しくないモチーフとしては次のような点があげられるだろう。

- 1) 騎馬試合 *tournoi* でもって物語が始まり、物語が終わる（写本の最初と最後は欠けているがそれほど多くの部分が欠けたわけではなさそうである）。
- 2) 婚姻の宴でフランス王がフラメンカに罪のない好意を示したことについて、嫉妬した王妃から忠告を受けたアルシャンポーは、自身が嫉妬する夫に変身し、すさんだ生活に陥る。あまつさえ妻を塔に嚴重に幽閉し、いっさい男の目に触れさせないようにする。
- 3) 主人公のギヨームとフラメンカには、それぞれお付きの召使い（楯持ちのオトンとクラリス、侍女のアリスとマルグリット）が二人ずつつき従う。主人公たちはかれらに思いのたけを告白し、かれらから忠告をえる（古典古代から始まり、17-18世紀以降の演劇にまで続く伝統）。オトンとアリス、クラリスとマルグリットも恋仲になる。

いっぽう『フラメンカ』に独自のモチーフ（ユニークさ）と残る謎は以下である。

- 1) 青年騎士ギヨーム・ド・ヌヴェールはフラメンカに近づくため、フラメンカが日曜日にミサのときだけ塔から出してもらえることを知り、なんとかして教会でフラメンカに話しかけようとする。そこで塔のそばの旅館に病氣療養を口実に居を構え、教会のひとの良い神父（ジュスタン師）を食事に招待する。その甥で助祭の仕事をしているニコラについて、「甥ごさんをこのまま埋もれさせるのはもったいないですよ、学資は出しますから」などと神父にとりいってニコラをパリに留学させてしまう。自分がパリで勉強して聖職者の資格をもっているのです、みずから助祭となるもくろみである。そしてミサ中の儀式を利用して、日曜日ごとに夫に気づかれぬよう一言ずつ、フラメンカに声をかけて意を通じさせる。すなわち、ここでは騎士であるギヨームが聖職者になりかわるのであり、当時の三身分のうちの「戦う人」*bellatores* と「祈る人」*predicatores* のどちらが完璧な恋人たりうかを論じるいわゆる聖職者・騎士論争にかかわる筋立てである（cf. v. 5213）。

- 2) アルシャンボーの嫉妬が、フラメンカの不倫の成就とともに治まってくる不思議。
- 3) 日常生活の描写・リアリズム（ギヨームの泊まる宿屋にある温泉の効能書きなど）。
- 4) 宿の亭主とおかみを、自分の病気を口実に別邸に追い払ってしまう（他の人がいると私の病は治らないのと言って）。人夫を呼びあつめて、企みが露見しないように旅館から、フラメンカのいる塔に併設された温泉場にひそかに地下道を掘らせる。彼女をそこから旅館に連れ込もうという算段である。もちろん入浴中は夫が外から施錠し誰も入らないよう怖い顔をして見張っている。
- 5) カレンダー、とくに教会暦への異常なほどのこだわり。作者が教会関係者であることを示唆するものであろう。
- 6) ペイレ・ロジエルの内的対話詩の利用。中世の物語によく用いられる手法だが、主人公二人の心理を表現する上で、それぞれの心のなかでの葛藤を対話により、ひじょうに巧みにしめしている⁽⁹⁾。「トルバドゥールの師匠」と呼ばれたジラウト・デ・ボルネーユにも似た作品がある。
- 7) 懊悩する主人公ギヨームに、フラメンカが夢のなかで逢い引きのための策を伝授する。
- 8) フェティッシュなシーンの多いこと。温泉場の硫黄の臭い (v. 6753)。嗅覚・触覚・視覚の総動員といってよい。頻繁に描かれる宴会のシーンや騎馬試合の喧騒 (cf. vv. 7692-9697) を思えば、味覚・聴覚にも関連する。
 - ①フラメンカが教会で接吻を与えた聖務日課書のページにギヨームが千回もキスする (v. 2597)。
 - ②その本のページを自分の顔に押しつけて、その変態的な行為をフラメンカが見てくれているか、などと虫のいい想像をする (v. 3184-3191)。
 - ③剃髪したギヨームの髪を宿のおかみがとっておいて飾り紐に縫い上げ、フラメンカにプレゼント。フラメンカはそれをマントの留め具とするが、それにやはり千回接吻する (v. 3585-3592)。
 - ④フラメンカといったん分かれたギヨームは、巧みにアルシャンボーをとおして彼女に恋愛書簡詩 *salut d'amour* (アルシャンボーに悟られないよう「ベルモンの美女」宛にしてある) を送る。これを記した鞣皮紙の紙葉には、ミニアチュールに男と女が描かれている。この人物像は、自分とギヨームのことだと見て取ったフラメンカは、それを巧みに二つ折りにして男が女を抱いているようにくっつける。そしてその紙葉を毎晩のように抱いて寝る (v. 7131-7134)。このあたりは大略以下のようなようである。

アルシャンボーはフランドル伯主催の騎馬試合より戻ってから、ギヨームという強い騎士がいたとほめちぎる。アリスはこれを聞いていたずらっぽく、そのお方の強い理由はひょっとして恋

をなさっているからなのでは？と尋ねた。「奴が恋をしているって？してるともさ (v. 7061), その証拠は手紙だ。あいつの恋人へのラブレターなのだ。この財布に入れてあるから見せてやろう。どんな風に愛しているのか知りたいと思って、わしはあいつに頼んで書いてもらったのだ。」フラメンカはアルシャンボーをおだてて、それを読ませる。「ギヨームの相手の貴婦人はベルモンの奥方というのだ。お前をのぞいて、この世で一番の美女なのだぞ (v. 7099) (ここから肝心の恋文の本文3葉が欠損している!))。

- 9) フラメンカの生地は Nemur(s) と写本で綴られているが、これが北仏のヌムール Nemours か、あるいは今のベルギーのナミュール Namur なのか？昔からこの問題については論争があった⁽¹⁰⁾。フラメンカという名前は flamme 「炎」との連想から「火のような、燃えるような女性」という含意がありうるだけではなく、「フランドル娘」という意味をとることも可能で、父伯の居住する Nemur(s) がフランドルの「ナミュール」であることを示唆している。ズユフレとファッスールの解説ではこのあたりの物語の深い読みと歴史的な考証をかなり説得的にしめしている⁽¹¹⁾。物語冒頭のフラメンカの父であるギー伯が催した Nemur(s) での祝宴は、物語最終部でのフランドル伯宮廷におけるギヨームの活躍に対応していないだろうか。また、嫉妬の病から直ったアルシャンボーがルーヴァンの騎馬試合に参加してブルボンに戻る途中に、フラメンカの弟のジョスランとともに Nemur(s) に立ち寄る。Nemur(s) 伯の歓待を受けた後にブルボンに帰還するのに、ゆうに2週間を要している (v. 7041 : *De carerma una setzena* « seize jours (deux semaines) de carême »)。冒頭でギー伯の祝宴に出席するためアルシャンボーが要した時間 (v. 110 : *.XV. jorns*) にぴったり対応しており、馬で行き来するブルボン—ナミュール間の距離と合う。ブルボン—ヌムールなら4日あれば十分であろう。

Ⅲ. 「太陽が恥じらうように赤く昇ると」—大団円での大胆さ

以下にこの物語の大団円の部分を少し詳しく紹介したい。ギヨームがフラメンカの通う温泉場に地下道を通じさせ、逢い引きに成功し不倫関係を続けているうちに、フラメンカはだんだん夫に対して強くでる女に成長する。父や夫に従順だったヒロインが、主張の強い奔放な女性に変貌する。他方、不思議なことに、この不倫の愛が成就した頃より、アルシャンボーの嫉妬の病は治まってくる。フラメンカはギヨームに、このような関係をいたずらに続けていてもしかたがないから、いったん分かれてギヨームに騎馬試合で活躍して出直してきて頂戴と頼む。涙の別れの後、ギヨームはフランドルで戦功を重ねる。その評判はアルシャンボーにも届くのであった。

試合の前日に千人の部下を引き連れてギヨーム・ド・ヌヴェールが到着した (v. 7261)。テントを設営すると、アルシャンボーに挨拶に向かう。アルシャンボーはギヨームの二人の楯持ちの

オトンとクラリスを騎士に叙任した。ギヨームは奥方さまにご挨拶をさせていただきますと頼む。フラメンカは宮廷の広間でフランス国王一行と談笑していた。私の横にお座りくださいとフラメンカがいう。王はそれを許して、ギヨームに会ったことがおありかと尋ねる。「いいえ。噂にきいていたものですから。」王が立ち上がって別の方を向いたとき、フラメンカはギヨームにキスをして囁いた。「宮廷で抱き合うなんて、ふたりだけですよりずっとスリルがあるわね (v. 7340)。」二人はこうして愛を確かめ合うが、宮廷の中なので、それ以上のことはできない。欲望で死にそうです (v. 7416) というギヨームに「今夜オトンとクラリスだけ連れてここにいらして。アルシャンボー殿は王さまのご一行に挨拶に行くので留守にします。何回でもキスできるし、愛の掟にしたがって何でもしてあげます (v. 7432)」。ここは抱擁だけがまんして、夕食 (*apres sopar*, v. 7463) のあとに、ギヨームはフラメンカに会いに行く。

何とか2人だけになろうと彼女が思案していると、そっと入って来たアルシャンボーがいう「お前の親戚のバール伯と弟のロラン殿、他に十人あまりを明日の朝、騎士に叙任するつもりだ。」「まあ、あの人たちにあげる贈り物はたくさんありますが、誰に何をさしあげたらいいのかわかりません。」「ここにいるギヨーム殿やオトンとクラリスが手伝ってくれるはずだ。」「それなら私たちの寝室にご案内してください。」フラメンカはたくさんの宝石などを床の絨毯の上に並べさせる。アルシャンボーは「なんとまあ、いっぱいあることか。みんなで贈り物を決めなさい。」ギヨームに「ちょっと失礼します。あとでまたここでお目にかかりましょう」といって出て行く。ギヨームはどの贈り物を選ぶかなどどうでもよかった。自分には目の前に一番のプレゼントがいるのではないか (v. 7629)。

Ans an tut tres assas baisat,	さて3人はみな存分に抱擁し
Tengut estreg e manejat ;	ひしと抱き合って愛撫した
Et altre si's feiron ben leu,	そしておそらく他のこともしただろうが
De qu'ieu a dir cocha non leu,	私がそれを語るのは野暮というものだろう
Mais tant y feiron a lur guisa	とにかくそこで快樂のかぎりを尽くし
<u>Ques anc ni blislaus ni camisa</u>	<u>長衣 (プリオ) も肌着 (シュミーズ) も</u>
<u>Non tolc ren de lur benanansa.</u>	<u>かれらの喜びには全然邪魔にならなかった</u>

(vv. 7643-7649)

ここの最後の2行、かれらは愛の限りを尽くしたのだが、そのさい長衣も肌着も快樂の邪魔にはぜんぜんならなかったというくだり (vv. 7648-7649) は、詩行が削り取られている。いつの頃かわからない。これにショックを受けた読者がここを削ったようである。ポール・メイエルは *réactif* と称する薬品 (試薬) をかけて読もうとした⁽¹²⁾ が、かえって逆効果だった。ズユフレは

ここを紫外線ランプ la lampe à rayons ultraviolets を用いてみな読めたという。ちなみにメイエル第2版のテキストは、*Que anc ni blisaut ni camisa Non tolc res de lur benanansa* (註「各行最初の3語は〔試薬を用いたものの〕はっきりしないまま」)であり、グシュヴィンドはシャバノーの提案をいれて：*ques anc ni blisaut ni camisa / non tolc ren de lur benanansa*, マネッティは、*q[...] ni blisaut (?) ni camisa / n[...] res (?) de lur benanansa* である。

その少し後を検討しよう。ギヨームがオトンとクラリスとともに情事を終えて、夫婦の居室⁽¹³⁾の扉を開ける (v. 7653) と、外ではみんながかれらに挨拶をする。

Flamenca remas jausionda ;	フラメンカは喜びの余韻にひたっていた
Vejaire l'es que ben aonda	いまは自分の恋人には望む限りの
A son amic zo qu'ar a fag.	ことをしてあげたと思われる
<u>Anc mais dona tan ric assag</u>	<u>貴婦人がこれほど大胆な試みを</u>
<u>Non auset empenre, so'm cug,</u>	<u>やっつてのけたのは前代未聞だと私はおもう</u>
Qu'en plena cort, on ren non fug	宮廷のど真ん中 人々の目からも手からも
Ad oill, a man ni ad aureilla,	耳からも逃げようのないところで
Ab son amic baisan cosseilla	恋人とキスしながら睦みあったばかりか
E, vezent totz, lo colg'ab se,	皆の見ているところで誰もまったく気がつかないうちに
Que negus homs no'n conois re.	同衾してしまったのだから

(vv. 7665-7674)

7668行の *tan ric assag* に注意したい。*assag* (*asag, esag*) はフランス語の *essai* にあたり、「企て」「行為」という意であろう。しかしオック語の抒情詩ではエロティックなニュアンスを含むことがある。「愛人を試すこと、本心からの愛か、たんに肉欲だけなのかを知るために女性が恋人に課す一種の試練」⁽¹⁴⁾の意もあり、それがひどく *ric*「濃厚な」(「大胆な」と訳しておいた)ものだったことになる。

Al matin foron adobat	翌朝あの立派な男たちが騎士に叙任された
Cil ric hom ques an donat	かれらがギヨームに〔前夜 贈物の選択を口実として〕
A Guillem aitan gran deleg	あれほどの悦楽を与えることになったわけだ
Quar N'Archimbautz lo mes el lieg	アルシャンボー殿が 彼をベッドに入れたわけで
On ab sa domna poc jasser,	ギヨームはそのベッドで彼の奥方と寝て
Aissi co's fes a som plazer.	快樂をきわめることができたのである

「太陽が恥じらうかのように赤く昇ると」

Mais le caitius non s'en garava, だがこの哀れな男はそれに気がつかなかった
Car el sacramen si fizava なぜならフラメンカの誓いを信じきって
E'l sophisme non entendia そこに彼女の秘めた詭弁に
Que Flamenca mes y avia. 思いがいたらなかったのだ
Baboïns es e folz e nescis 自分は気前がいいと思いき
— S'era plus savis Boecis — 妻をその愛人のために用意するような夫は
Maritz ques, on despendre cuja, たとえポエチウスより賢いとしても
Que mullier ad amic estuja. 愚かで馬鹿で無知なのである

Lo ben mati, quan le soleills

翌朝早くに太陽が

Quais vergoïnos parec vermeilz, 恥じらうかのように赤く昇ると
Après lo sein de las matinas 朝課の鐘が鳴ったあとで
Ausiras trombas e bozinas, 騎馬試合を告げるらっぱやホルンやシンバルや
Grailles e corns, cembolz, tabors 角笛や太鼓の音が鳴り響いてきた

(v. 7675-7693)

ここで「翌朝早くに陽が恥じらうかのように赤く昇ると」(vv. 7689-7690) という表現に着目したい。なぜ太陽が恥じ入って赤くならなければならないのだろうか？太陽が昇るときに *vermeil* 「鮮紅色の」という形容詞を用いるのはフランス語ではふつうである。しかし太陽が「恥じらうかのように」というのは尋常ではない。フラメンカやギヨームが前夜の大胆な房事で顔を赤くするのならともかく、このような擬人法はめずらしいのではないだろうか。

vergoïnos という単語について少しばかり調べてみよう。語源の FEW14, 280b-283a VĒRĒCŪNDIA “scheu, shamgefühl” (Fr. *verguigne* (...); apr. *vergonha*) では、派生した形容詞について、(古) 仏語 *vergoigneux*, 古オック語 *vergonhos* “honteux ; timide” (Rn ; Lv ; Gir-Born ; BernVent.) とあるだけである。イヴ・ロブロー『名誉と恥—「散文ランスローグラーレ物語」中のそれらの表現について』(1981年) という古仏語作品を題材にした研究を参照すると⁽¹⁵⁾, « *vergoigne et les mots de la même famille* » という章で、ラテン語のもとの意味「恥じらい、慎み」がスエトニウスあたりから「赤面すること」の意となったとして、古仏語の例で『散文ランスロ』が引かれる。パンの名づけ息子のパンが初めてアルチュール王と食事をしたときの様子で, *Lors ot Banin un poi vergoigne et la coulor li monte el vis, si en devint tous vermaus et moult biax et bien li sist* (éd. Sommer, III, 109, l. 30-35) という例が引かれる。しかし、とくに「裸体でいること, 性行為, 性器 [への恥じらい]」をさすのに用いられたらしい。

いっぽうトルバドゥールの語彙を研究したクロップは、トルバドゥールの詩において一般に *vergonha* は「(性的なことがらにたいする) 恥じらい *pudeur*」をしめしたとする⁽¹⁶⁾。「太陽が赤

くなる」ことを比喩表現としてとらえて、このような場合がほかに古仏語、古オック語にあるかどうか。ツィルテナーの労作『比喩表現一覧』をひもとくと、Soleilの項でその「色」Farbe (no. 127-131)の部分に *devenç pus vermels Qe'l maty qan leva solels* (La Cour d'amor, *RlaR*, t. 20, 1881, vv. 458-459)があるものの、ここの例はない。この一覧の最大の欠点は「～のように」commeなどといった明喩のみを収録して、メタファー（隠喩）はふくまれていないことである（もっとも隠喩を定義してそれをテキストから抽出するのはほとんど不可能だが）。

この比喩表現に注目したのは私だけかと思っていたら、じつはジェラル・グイランが物語の別の部分をからめてすでに1983年の論文で論じていた。いわく「541-553行にかけての最後の数行はきわめて示唆的である。フラメンカの肌の輝きは、他の女性たちの美しさを霞ませてしまい、無にしてしまうというのである。ところでこれらの美しい貴婦人たち自身も物語の最後に語られるように、輝きの源泉である (vv. 7555-7559)。ヒロインはここで他の星々を圧倒してしまうような天体、つまり太陽であると言っているのではないか (vv. 7558-7559)」。グイランは続けて、「フラメンカと太陽の入れ替わりのプロセスを有効にするためには、メタファーが2つの方向に働く必要がある。もし人間であるフラメンカが太陽でありうるなら、天体自身もときに人間的な感情をしめす必要がある。すなわち7689-7690行の、「太陽が朝早く恥じらうかのように赤く昇ると」である。ここで読者はフラメンカの行為についての道徳的な判断を下せるわけだ」。他方では、ギヨームが教会でフラメンカの顔をかいま見たとき「太陽はきわめて好意的なことをした」*Le soleils fes mout qu'avinens*, (v. 2491)ののだが、それは一条の光線でフラメンカを瞬間的に照らし出したからである。グイランによれば、太陽が赤く昇ることと、女性の顔を鮮紅色で照らしたことで、比較の用語の転置がここでみられるという⁽¹⁷⁾。鋭い指摘である。太陽のように輝く美女といえבתなる強調のメタファーと読んで読み流してしまうところである。作者はしかしこの比喩を作中あちこちで戦略的に用いているのであった。

フラメンカは太陽なのである。そうであればこそ、翌朝、恥ずかしさで顔が赤くなっているわけである。その伏線は以前の叙述にすでに何回も張られていた。3100行付近ではこうあった。ギヨームが教会でフラメンカの顔を初めて見つめる描写である。

「翌朝もギヨームはピエール [ギヨームの宿泊している旅館の主人] とともに教会におもむき、膝をついて主なる神に祈るが、二人は同じ父なる神に祈る「兄弟」ではあっても、かれらの祈りは「兄弟」ではなかった [内容はまったく異なっていた] (3099-3100)。今回は教会に入場するさい、フラメンカは少し長く扉口にとどまって祈りをささげ、右手の手袋を外して顔の下を覆うヴェールを下げたから、彼女の口をじっくりと眺めることができた。目でもって彼はその口に接吻し、愛撫し、奥の席まで同行するのだった。ギヨームには、こんなに運のよい月曜はこれまでめぐりあったことがないように思われる。太陽が、神に祈りを捧げて膝まづいているもうひとつ

の太陽のいたところにさっと光線を投げかけるのだった (*Le soleil non demoret gaire C'un rai aqui non trames<es> On l'autre soleil s'era mes Qu'en orason vau Dieus s'acлина ;*) (3130-3133)。「もうひとつの太陽」とはフラメンカに他ならない。

ところでシャンボンがもう少し先の「太陽」に着目している。フラメンカのセニャル (senhal 仮の名, ニックネーム) として「太陽」があると主張するのである。教会で密かにひとことずつ交わしているあいだに, じょじょに二人の気持ちは通じ合ってきた。教会での次回の返事はどうしたらいいかしらと悩んでいるフラメンカに, 侍女の一人で機転のきくアリスがこう述べる。「おふたりが一緒になるとこの世で匹敵するものはありません。月や太陽もかたなしです。あの方が (男の) 太陽ならば, あなたは (女の) 太陽なのですから」 *E dic vos, quan sere<z> amdui, El mon non aura tal pareil, Negeis la luna ni'l soleil. El es soleil e vos soleilla*, (vv. 5016-5019)。ズユフレの解にしたがえばこのようになる。この最後の *soleilla* が問題である。*soleillar* 「光り輝かせる」という動詞を推定してその3人称単数現在形ととり, 「あの方は太陽で [あるとすれば, あなたが月であるように] あなたを輝かせています」ととる (ネリ-ラヴォー, ビイイ “Il est soleil et vous fait resplendir”) か, あるいは一種のこぼ遊びで, *soleilla* は *soleilz* の女性形ととらえる (メイエル第2版 (“forme féminine de *soleil* créée pour le besoin de l'idée”), Hubert-Porter (“He is the sun, you the sun's mate”), グシュヴィンド, マネッティ (“un sole femmina”, p. 332), ズユフレ “Il est soleil et vous soleille”) か2つに解釈が分かれていた。フラメンカはギヨームの光を受ける月といったより暗い存在ではなく, 二人は同じ明るさでなくてはならないはずだとしてズユフレは前者の解釈を斥けている。前の行に「月も太陽も」とあるから, ここは私には動詞してとるほうが自然にみえる。

シャンボンは2018年に, 太陽の女性形説をさらに進めて「あの方は太陽であり, あなたさまもそう。ソレリヤさま!」と解釈しているのである。セニャルは詩人が愛するダームを实名で呼ぶのを避けるためのニックネームであるから, これはずいぶん無理のある解釈のように私にはみえる。シャンボンは, *Domna, mesatg'eu sui* で始まる作者不明の一詩節だけの作品 *cobla* (PC 461, 90) の3行目に同じような例があるとして, 「ソレリヤ」は *hapax* ではないとする (「奥方さま, あなたを愛するお方からの 私は使者でございます ご承知おきください ソレリヤさま, 匹敵する人はいませんよ」 *Donna, mesç'eu sui, / be sapçaç, de celui /qe vos ama, Soleilla, / e no avez, donna, pareilla!*⁽¹⁸⁾)。シャンボンはさらに, 『フラメンカ』を読んだこの詩節の作者がそれへのオマージュとしてここに用いたのではないかとまで推測している。この論文の追記には, ジル・ロックからの指摘にしたがい中期フランス語に聖女マリアを指すのに *solaille* という女性形も確認できる (DMF, *soleille* の項: *Diex est solaus, elle solaille*) という。たしかに構文も文脈も似ている。

ところで私が問題にしていた7690行は, じつは写本どおりではない。メイエルが1865年にここ

の読みを訂正して以来、それが踏襲されてきた。写字生は *quar iuergoinos parec uermeilz* と記し、*uergoinos* の前の *i* には上下に *exponctuation* 「この字抹消」の点を付している。写本を仔細に見てみると、この134葉の表では、写字生は疲労のためか誤記を犯してあとで直している部分が多い。ここからわずかに9行の間に4箇所書き損じをして、上下あるいは下に点を付してそこを抹消している。メイエルは、この行の冒頭の *quar* では意味が通じないために、v. 7357 : *Ot. e claris cais uergoinos* « Othon et Claris, comme honteux, [demandèrent] » を参考にして、しかし7690行の *qu-* は生かして *quais* に直したのであろう。

※ ※ ※

ポール・メイエルはすでに1865年の時点で、この物語が空前絶後のものであることを指摘していた。ギヨーム・ド・ヌヴェールがそのゲームと会話をかわすために作り出したような教会でのシチュエーションは後にも先にも存在しないと述べている⁽¹⁹⁾。

トルバドゥールの抒情詩に代表される南仏の文化のよき時代は、『フラメンカ』の記されたころにはもう過ぎ去っていた。作者は南仏よりも北フランスと関係が深い。13世紀は北フランスの王権の伸張する時期であった。アルシャンボーはフランス王夫妻を結婚式に招待する。アルシャンボーがギヨームと出会うのはブラバン公の催した騎馬試合においてであった。フラメンカを塔から自由の身にした後にアルシャンボーが招くのも、シャンパーニュ伯、フランドル伯、ブリエヌ伯、サン・ポール伯、ルーヴァン伯、ムランの副伯であった。細かい描写も北仏である。シャンパーニュの大市、ギヨームのハーフブーツはドゥエ製、フランス製のバックルのついたベルト、カンブレの毛皮、ギヨームについていえば、ペロンヌの聖堂参事会会員を自称し、パリで学業を修め、ニコラを送り出すのもパリであった。登場する南仏人は詩人マルカブリュひとりにすぎない (v. 702)⁽²⁰⁾。

この物語で作者は、ブルボン・ラルシャンボーをはじめ現実の地名や人名をもってきて、それでいてなお現実と混同させないように工夫している。ナミュールかヌムールかという問題もひょっとすると作者がわざとぼかしているのかもしれない。フラメンカの育った地がヌムールであった場合、つまり父親がヌムール伯であったとして、ラ・ファイエット夫人による『クレーヴの大公夫人』(1678年)との関連が指摘できる。おなじように三角関係と嫉妬が主題である。若くて美貌のヌムール公がクレーヴ大公夫人に心を奪われ、夫人もヌムール公に惹かれるが、夫のクレーヴ公にそれを打ち明けたため、クレーヴ公は嫉妬の心労で死んでしまうという小説である。夫に打ち明けようとする前に妻はこういう。「これから私がしようとしている告白は、これまで世の妻が夫にしたことのないような告白です」。有名なせりふである。私は『フラメンカ』を読んだとき、7668-7669行の「貴婦人がこれほど濃厚な試みをやったのは前代未聞だと私は

おもう（思うに奥方がこれほど大胆な行為を取っておかしたことはなかった）」を思い出した。ミヤルデになると、初めて風呂場の地下道からフラメンカの前に現れたギョームの偉丈夫な姿を描写するときに、モーパッサンの『温泉モントリオル』Mont-Oriol（1887年）の色男ポール・ブレチニーまで引き合いにだしている⁽²¹⁾。この小説の舞台もオーヴェルニュの温泉で、ブルボン・ラルシャンポーにほど近い場所であった。『フラメンカ』はこのように、いわゆる「間テクスト性」*intertextualité* への可能性が開けている。

現存写本のもつマテリアルな問題の放つ魅力、つまり冒頭と巻末の欠損部分や途中での紙葉の切除、読者による自己検閲（詩行の削り取り *grattage*）、さらにいえばポール・メイエルによる「試薬」の不用意な（？）使用まで、テキスト内の「不在」にかかわる部分にもこと欠かない。

フラメンカが太陽と同一視されるという点にかんして、ミシェル・レリスの *La femme, c'est la flamme sans aile*⁽²²⁾「女というものは羽のない炎である」という句を想起せざるを得ない。ジャン＝シャルル・ユシェの校本は文献学的にはあまり価値のないものだが、テキスト冒頭にミシェル・レリスのこの句が引用されている。*flamme* から、*-l*をとると *femme* になるという洒落である。じっさいフラメンカという奇妙な名前の由来は不明であり、それがまた魅力のひとつになっている。そこに「炎のように髪が赤い」「炎のように情熱的」といったニュアンスも読みとることは容易である。フラメンカ「太陽」説もこれに関連するのかもしれない。

注

- (1) Cf. Chambon et Greub, c.-r. sur Zufferey-Fasseur (2015), p. 75.
- (2) 日仏会館主催の文化講座「中世の誘惑」（2013年6月）中の発表において、私はしばらく離れていた『フラメンカ』を題材にする機会があった。以下の文章はこれに一部想を得ている。講座を主催された篠田勝英氏に深謝したい。
- (3) 現在は次のサイトに電子化されている (<http://occitanica.eu/omeka/items/show/4395>) (2018年9月12日閲覧)。電子化される前にカルカッソヌの図書館に私が個人的に依頼したCDヴァージョンも参照した。以下、作品の引用は、最新のZufferey-Fasseur版を用いる。〈 〉内は校訂者による付加部分である。
- (4) Chabaneau (1902), p. 6 et 43. なお、Limentani (1965) は古文書学校の *secrétaire* であった Jacques Monfrin にメイエルの第2巻の草稿について尋ねたところ、何も残っていないと返事があったむね記している (Limentani (1977), p. 291)。
- (5) Cf. Zufferey-Fasseur (2014), pp. 94-95 et 110.
- (6) 稿末の書誌には、この新しい2つの校訂版にかんして私の知る限りの、そしてそれ以前の校訂についてはとくに重要な書評を載せておいた。19-20世紀に出た『フラメンカ』関連の文献は膨大にあるが、Grimm (1930), pp. 11-25; Limentani (1965), pp. VII-XXXVII; Limentani (1977), pp. 291-303; *RLaR*, t. 92-1 (『フラメンカ』特集号), 1988, pp. 105-123; Gschwind (1976), t. 2, pp. 353-362; Manetti (2008), pp. 611-638; Zufferey-Fasseur (2014), pp. 113-126に付された書誌で、だいたい展望が得られる。
- (7) 『フラメンカ』にかんして、*lexicographie* の面から精力的に論文を発表している Jean-Pierre Chambon は、この解説部分を評して「肝をつぶさせるような大論文 *une ébouriffante dissertation*」だと皮肉をとばしている。語彙の詳細きわまる研究を評価する立場から、当然ながら Manetti の完全版を称揚し、こちらには手厳しい批判を加えている (*RcritPhRom*, t.16, 2015, p. 74-136. Jan Greub との共同執筆)。これに対して同誌の編集者は

Chambon の書評の後に *réplique de l'éditeur* を掲載した。Zufferey はその項で、この書評を « un exercice pratiqué sur un ton magistral et parfois même pédant » と決めつけている。たしかに DEAF Complément 2016, col. 305では Chambon のこの書評を「些細なことで戦をしかけている」« quelque peu pichrocolin [pichrocolin ?] » と評している。たとえば、Zufferey が Chabaneau のことを「パリではそれほど著名でない郵便局員あがりの地方の碩学だった」と形容したかのように Chambon は p. 80で書いているが、Zufferey の反論どおり (p. 136), これは Chambon による Millardet の偏見を交えた文章の不完全な引用 (p. 3) であり、Zufferey は Chabaneau へのその種の侮蔑を遺憾に思うと述べている (Millardet も Chambon もソルボンヌの教授)。いっぽう Zufferey のほうも、2014年の校訂における書誌で、先行の校訂の書評は網羅的にあげると言いつつ、Manetti の校訂が出てから6年もたっているのに、Manetti の仕事にたいする書評をひとつも載せていない。これは奇異とするに足りる (cf. c.-r. de Billy (2016), p. 262, n. 1)。ところで Chambon は『フラメンカ』の作者の言語がトルバドゥールの Daude de Pradas (1208以前-1242年以降) のものに酷似しているという説を近年展開している (Chambon (2015); Chambon-Greub, c.-r. sur Zufferey-Fasseur, 2015, p. 77)。

- (8) Asperti (1985). Cf. Zufferey-Fasseur (2014), p. 94.
- (9) ラングロワが、この作品で唯一古くさく感じられるかもしれないと指摘しているのが、この部分である。「いちばん成功した部分と作者はおそらく自負していたであろうが、ギヨームの心の中で交わすモノローグはなかなか終わらない。これは恋愛の形而上学と心理学についての当時の流行であった」(Langlois (1926), p. 131) という。
- (10) Cf. Millardet (1934), pp. 22-23; Zufferey-Fasseur (2014), p. 13.
- (11) Zufferey-Fasseur (2014), pp. 12-33.
- (12) Meyer (1901), p. 284. 旧版 (1865) の p. 262には、この2行がひじょうにうまく削り取られているので私は何も解説できなかつたと註していた。cf. Gschwind (1976), t. 2, p. 57.
- (13) 夫婦の居室には *cambra* « chambre » という語が使われている (*las cambras* (v.7602), *la cambra* (v. 7609, 7629, 7653)。領主の館 (宮廷) にはそこに住まう貴婦人や侍女たちの居室があり、それも chambre である。大広間は *la grant sale* あるいは *palais* と呼ばれ、領主が会議を開いたり、一同で食事をしたり、客人を囲んだり、祝宴を開く場所であった (cf. Lucien Foulet, *The Continuations of the Old French "Perceval" of Chrétien de Troyes, vol. III, part 2, Glossary of the First Continuation*, Philadelphia, The American Philosophical Society, 1955, p. 39)。
- (14) Nelli (1963), p. 199.
- (15) Robreau (1981), pp. 170-180.
- (16) Cropp (1975), p. 201, n. 71.
- (17) Gouiran (1983), pp. 143-144.
- (18) ここは *Salutz d'amor, edizione critica del corpus occitanico*, a cura di Francesca Gambino, introduzione e nota ai testi di Speranza Cerullo, Roma, Salerno, 2009, pp. 696-697によつた。
- (19) Meyer (1865), p. VI.
- (20) Meyer (1865), pp. XX-XXI; Zufferey-Fasseur (2014), p. 55. トルバドゥールとしては唯一この作品で言及されるマルカブリュは、たぶん同時期に記された北仏の物語 *Joufroi de Poitiers* に登場しており、こちらも夫の嫉妬から妻が塔に幽閉されるという設定をもっている。これはまた別の研究テーマである (cf. Millardet (1934), pp. 15-16; Valérie Fasseur, « Anamorphoses d'un discours amoureux : présence de Marcabru dans *Joufroi de Poitiers* », in *Romania*, t. 127, 2009, pp. 86-103)。
- (21) Millardet (1934), pp. 41-43.
- (22) Michel Leiris, *Mots sans mémoire*, Paris, Gallimard, 1939, 1969, p. 88 (この出典は千葉文夫氏のご教示による)。

書誌 (抄)

1) 校訂版と書評 (年代順)

- Meyer (Paul), *Le Roman de Flamenca, publié d'après le manuscrit unique de Carcassonne, traduit et accompagné d'un glossaire*, Paris, F. Franck / Beziers, J. Delpech, 1865.
c.-r. : Adolf Tobler, in *Vermischte Beiträge*, t. V, 1912, pp. 275-291 (*Göttingische Gelehrte Anzeigen*, 1866, St. 45, pp. 1767-1790).
c.-r. : Camille Chabaneau, in *RlaR*, t. 9, 1876, pp. 24-35 et 259.
- Meyer (Paul), *Le Roman de Flamenca, publié d'après le manuscrit unique de Carcassonne, traduit et accompagné d'un vocabulaire, 2^e éd. entièrement refondue*, t. 1^{er}, Paris, Emile Bouillon, 1901.
c.-r. : Antoine Thomas, in *Journal des savants*, 1901, pp. 363-374.
c.-r. : Camille Chabaneau, in *RlaR*, t. 45, 1902, pp. 5-43.
c.-r. : Adolf Tobler, *Vermischte Beiträge*, t. V, 1912, pp. 292-296 [*Archiv für das Studium der Neueren Sprachen und Literaturen*, t. 110, 1903, pp. 464-467].
- Lewent (Kurt), *Bruchstücke des provenzalischen Versromans Flamenca*, Halle / Saale, Max Niemeyer, 1926.
- Lavaud (René) et Nelli (René), *Le Roman de Flamenca*, in *Les troubadours*, t. 1, [Bruges,] Desclée de Brouwer, 1960, pp. 619-1063.
- Hubert (Merton J.) et Porter (Marion E.), *The Romance of Flamenca, A Provençal Poem of the thirteenth Century*, Princeton, Princeton University Press, 1962.
- Limentani (Alberto), *Las novas de Guillem de Nivers (« Flamenca »)*, Padova, Editrice Antenore, 1965.
- Gschwind (Ulrich), *Le Roman de Flamenca, nouvelle occitane du 13^e siècle*, Berne, Francke, 1976, 2 vols.
c.-r. : Max Pfister, in *Vox Romanica*, t.38, 1979, pp. 243-252.
c.-r. : 高塚洋太郎 「『フラメンカ物語』の新しい校訂本について」 『人文論究』 (関西学院大学). t. 28-1, 1978, pp. 55-68.
c.-r. : Suzanne Fleischman, in *Romance Philology*, t. 34, 1981, pp. 513-521.
- Huchet (Jean-Charles), *Flamenca, roman occitan du XIII^e siècle*, Paris, Union Générale d'Éditions, 1988 [coll. 10/18, no. 1927].
c.-r. : Gérard Gouiran, in *RlaR*, t. 93, 1989, pp. 132-138.
c.-r. : Max Pfister, in *Zfr*, t. 105, 1989, p. 650.
- Mancini (Mario), *Flamenca*, Roma, Carocci, 2006 [coll. Biblioteca medievale, no. 106].
- Manetti (Roberta), *Flamenca, romanzo occitano del XIII secolo*, Modena, Mucchi, 2008 [coll. « Subsidia » al « corpus des troubadours », nuova serie 8].
c.-r. : Peter T. Ricketts : in *Medium Aevum*, t. 79, 2010, pp. 357-358.
c.-r. : Paolo Gresti : in *Vox Romanica*, t. 70, 2011, pp. 375-379.
c.-r. : Francesco Carapezza : in *Medioevo Romanzo*, t.36, 2012, pp. 209-212.
- Zufferey (François) et Fasseur (Valérie), *Flamenca, texte édité d'après le manuscrit unique de Carcassonne*, [Paris,] Le livre de poche, Librairie Générale Française, 2014 [coll. Lettres gothiques].
c.-r. : Jean-Pierre Chambon et Yan Greub, in *Revue critique de philologie romane*, t. 16, 2015, pp. 74-136 [Réplique de l'éditeur : pp. 136-157].
c.-r. : Dominique Billy, in *RLiR*, t. 80, 2016, pp. 262-275.

2) 研究書・研究論文 (著者のアルファベット順)

- Asperti (Stefano), « *Flamenca e dintorni. Considerazioni sui rapporti fra Occitania e Catalogna nel XIV secolo* »,

- in *Cultura Neolatina*, t. 45, 1985, pp. 59-103.
- Cropp (Glynnis M.), *Le vocabulaire courtois des troubadours de l'époque classique*, Genève, Droz, 1975.
- Chambon (Jean-Pierre), « Pour le commentaire de *Flamenca* (I). Dialogue à Nemurs (vers 1-58) », in *RlaR*, t. 98, 1994, pp. 145-169.
- id.*, « Pour le commentaire de *Flamenca* (II). Le personnage de Robert », in *RlaR*, t. 98, 1994, pp. 171-188.
- id.* et Vialle (Colette), « Pour le commentaire de *Flamenca* (III). Nouvelles propositions concernant le cadre chronologique », in *RlaR*, t. 114, 2010, pp. 155-177.
- id.*, « Un auteur pour *Flamenca* ? », in *Cultura Neolatina*, t. 75, 2015, pp. 229-271.
- id.*, « Ancien occitan *Soleilla* : un autre nom de *Flamenca* », in *RliR*, t. 82, 2018, pp. 161-167.
- Gouiran (Gérard), « *Flamenca* : du “grand soleil d’amour chargé” aux princes de la nuit », in *Sénéfiance* (Le soleil, la lune et les étoiles au Moyen Âge), t. 13, 1983, pp. 141-157.
- Grimm (Charles), *Études sur le Roman de Flamenca, poème provençal du XIII^e siècle*, Paris, Droz, 1930.
- Langlois (Charles -Victor), *La vie en France au Moyen Âge, de la fin du XII^e au milieu du XIV^e siècle d'après des romans mondains du temps*, Paris, 1926, pp. 127-176.
- Langobardi (Monica), « “Manca sempre una cosa” (F. Pessoa). Alcune osservazioni sulla traduzione di *Flamenca* », in *Medioevo Romanzo*, t. 35, 2011, pp. 141-149.
- Limentani (Alberto), *L'Eccezione narrativa, la Provenza medievale et l'arte del racconto*, Torino, Giulio Einaudi, 1977, pp. 156-303 [« Il poeta di “Flamenca” e la sua cultura »].
- Millardet (Georges), *Le Roman de Flamenca*, Paris, Boivin, 1937.
- Nelli (René), *L'érotique des troubadours*, Toulouse, Privat, 1963.
- id.*, *Le Roman de Flamenca, un art d'aimer occitanien du XIII^e siècle*, Toulouse, Institut d'études occitanes, s. d., [1966].
- Robreau (Yvonne), *L'honneur et la honte, leur expression dans les romans en prose du Lancelot – Graal (XII^e – XIII^e siècles)*, Genève, Droz, 1981.
- Ziltener (Werner), *Repertorium der Gleichnisse und bildhaften Vergleiche der okzitanischen und der französischen Versliteratur des Mittelalters*, Bern, Francke, 1972-1989, 3 fascicules.